

カール・ビューラーの『言語理論』と モンタギュー意味論

— 指示と固有名 —

志 田 章

1

K. ビューラー (Karl Bühler) の『言語理論』¹⁾は、初版が1934年に刊行されている。彼は本来、精神科医であったが、彼の心理学的研究は言語と密接に関係し、時には言語そのものが問題になっている。『言語理論』はまさしく、彼が言語を直接研究した成果である。彼はこの著書では自分の専門分野である心理学上の観察結果を取り上げていないのであるが、その理由は「方法論上の統一からで、ほかに理由はない」(Bühler 1963. S.26[Vorwort])と述べ、さらに「今日私が望んでいることのひとつは、言語学からの言語分析の結果と、病理学の観察結果との相互交流である」(Ibid., S.26[Vorwort])と指摘しているように、彼が実際に目指したものは、心理学と言語学の共同作業による『言語理論』の構築であったと言ってよいであろう。これに加え看過してならないのは、彼がこの著作の中で、哲学者達の考えを、特に論理学について、歴史的な観点から批判を加え、自分の理論に組み入れようとしていることである。彼が活躍したのはちょうど、数学者フレーゲ、現象主義哲学の創始者E. フッサール (Edmund Husserl) が次々と論文を発表していた時でもあった。これらの学者の影響を受けて、論理学と哲学の分野ではフレーゲ及びフッサールの哲学に対する批判、心理学の分野ではその諸理論と臨床的な観察結果、言語学の分野では共時的並びに通時的な資料——これらの諸分野の理論と資料を駆使して構築しようとしたのが『言語理論』であったと言える。

R. モンタギュー (Richard Montague) は、主に19世紀後半のG. フ

レーゲ (Gottlob Frege) をはじめとする数学者及び論理学者達にその功績を負っている述語論理学 (Prädikatenlogik) を意味論に応用し、一般にモンタギュー意味論と呼ばれている、数学的な厳密性を基調とする形式的な意味論を公表した。この意味論の構想は、1960年から1970年代の初期に発表された一連の論文で次第に明らかにされ、1973年の『*The Proper Treatment of Quantification in Ordinary English*』²でその頂点に達したとされている。モンギュー意味論の核心でもある。述語論理学の成立には、純粋な数学的な考察の他に、心理主義 (Psychologismus) と形式主義 (Formalismus)、あるいは実念論 (Realismus) と唯名論 (Nominalismus) という哲学的な根本問題に対する批判精神が係わっている。純粋に数学的に見える述語論理学の成立過程には、純粋に哲学的な考察が関与していることを見逃してはならないのである。

2

『言語理論』 — 「指示語」と「命名語」

a) 「指示」における三つの形態

ビューラーによると、指示語 (Zeigwörter)、つまり人称代名詞及び指示不変化詞 (Zeigpartikeln) 例えば dort とか hier を用いて指示される場 (Feld) は指示場 (Zeigfeld) と呼ばれる。指示場は、なまの発話を取り巻く状況であり、具体的な発話現象 (das konkrete Sprechereignis) である。この談話の理解を助けるのは、何よりも先ずしぐさや心理学的にそのしぐさと同等の感覚的データである。指示語はこのしぐさを伴って使われ、発話状況の場にはめ込まれることによって、特定の場の値 (Feldwerte) を取る。指示語の意味の充足は、感覚的な指示の手段と強く結び付き、またそれに依存している指示語は、それ自体ではなんら特定の意味を持たず、指さしたり、顔を対象の方へ向けたりする感覚的な動作を伴って始めて意味が充足されるのである。この点において、指示語は命名語 (Nennwörter) とは異なり、それと明確に区別されなければならないとされている (Bühler, 1963, S.86)。ビューラーは指示の形態を3通りに分類している。1) 明視的指示 (demonstratio ad oculos) 2) 想定上の対象指示 (Deixis am Phantasma) 3) 反復指示 (Anaphor-

a)の三つである。明視的指示と想定上の対象指示は直接的に対象と関係し、想定上の指示場を形成するのに対し、反復指示は統語内にある語句や文或いは文の一部を指示し、象徴場 (Symbolfeld) を構成する一契機である、とされている (Ibid., S.80f.)。

まず明視的指示について解説してみたい。ビューラーは、ブルークマン (K. Brugmann) が構想した印度ゲルマン語の四つの指示様態を踏襲し、更にこれに対するヴァッカーナーゲル (J. Wackernagel) の提案を受け入れて、明視的指示について論じている。それらは、1) der-Deixis (これー指示) 2) hic-Deixis (ここー指示) 3) istic-Deixis (あそこー指示) 4) jener-Deixis (あれー指示) の四つである。この四つの様態の中で、ヴァッカーナーゲルはブルークマンが提示した Ich-Deixis と Du-Deixis をそれぞれ hic-Deixis と istic-Deixis に変更することを提案し、ビューラーはこの訂正に従っている (Ibid., S.83)。

これら四つの指示様態の中で根本を成すのは、hic-Deixis であるとビューラーは述べている (Ibid., S.93)。hic (ドイツ語 hier) -Deixis とし、次の例が挙げられている。「たとえば集会で出欠をとるために会員名簿が読み上げられるとき、誰でも自分の名前が読まれると hier と答えるときにはまた、見えないところや暗がりあるいは閉まっているドアのむこうから、wo bist du? という問いに hier で答え、wer da? という問いに ich で答える。これらは一見不十分な答えと思われるが、その返ってくる声のひびき具合 (Klang) から、話し手がどこにいるとか、あるいは話し手が誰であるかを受け手が決定できるか否かに応じて、十分な答えとなったりまったく不十分なものになったりする」。この例に見られる指示詞 hier が持つ特徴は、まず聞き手にとって hier というその声が聞こえてくる方向を示す性質 (räumliche Herkunftsqualität) であり、聞き手はその声の持つ個人的特徴から「重大な関心と長年の訓練によってその特徴を認め、われわれの回りの四、五十人あるいは百人のよく知っている話し手の誰々のものだ」と正しく言いあてるのである (Ibid., S.91)。つまり hic-Deixis の本質的特徴は、音声がか聞こえてくる方向を示すことであり、hier ist es trocken が正しく理解されるためには、音声の方向という直観的な場所規定の契機が不可欠なのである。hic-Deixis は当初ブル

ークマンによって Ich-Deixis と呼ばれていたが、ビューラーはヴァッカーナーゲルが提案した hic-Deixis という名称をより適切なものとして採用した。しかし、ブルークマンの提示した Ich-Deixis が全く的外れな呼び名であったというのではなく、それは指示語に共通する一つの根源的特徴の他にもう一つの特徴を持つというところに、この Ich-Deixis という名前が採用されなかった理由がある。ビューラーは人称代名詞 Ich は、音声の聞こえて来る方向を示す特徴の他にもう一つの特徴を持つことを指摘し、『『ここ』を表す語が方向を示す性質を持つのとほぼ同様の関係を、『私』を表す語は発話音声の個人的な声の特徴に対して持っている。われわれはだれでも生活経験から知っていることだが、聞いた声あるいは談話の個人的な（或いは典型的な）特徴は、音声の方向を示す性質とは別の集合の対応や解釈を許したまそうするようにしむけている』と述べている。つまり、wer da? という質問に対して Ich という答えが返ってきた場合、聞き手は、hier という返事の場合と同じように、まず声のする方向へ視線を向けるだけでなく同時に話し手が誰なのかという観相学的 (physiognomisch) な視線を交えるのである。純粹の hier は言語によるメッセージを送る者の位置の信号として機能し、純粹の Ich は個人の信号として機能するのである。このことから、hier は完全な指示語といえるが、Ich は指示語であるとともに、命名語的な特徴を持っているといえる。なぜなら、Ich は個人的な性質も指示しているからである (Ibid. S.94ff.)。これを認めながらも、ビューラーは、ブリンクマンが提示したラテン語の hic の起源について解説し、人称代名詞 Ich は本来、指示不変化詞 hier から派生したことに間違いはないだろうと述べ、Ich が指示詞であることを改めて強調している。彼は、指示語と命名語は互いに分離されるべきであり、明確に区別されなければならないと繰り返し指摘し、両者の違いは「指示語が命名語のようには、性質規定を行わないこと」にあるとしている。命名語である「概念記号」は、常に同一の対象を表す「象徴記号」であるのに対し、指示語は使われるたびごとに異なる対象を表す可能性を持っているのである (Ibid., S.115ff.)。命名語は対象間の共通な性質を表し、誰に対してもその同じ性質を示すが、指示語はそれだけでは何もかも表すことはなく、実際に発話が行われる状

況つまり指示場と深く結びつき、話し手のしぐさや声の特徴を手掛かりにしなければ、空虚な語で終わってしまうのである。ビューラーがカント (E. Kant) の言葉を引いて正鵠にも指摘しているように、「直観を伴わぬ概念は無に等しく……、この深遠な意味を持つ言語の直観的な契機は……言語の指示場の領域内に見いだされる」のである (Ibid., S.153).

b) 命名語と象徴場

これまで見てきたように、指示語は発話状況と直接的かつ密接に結びつきそこから離しては意味の充足を得ることは不可能であった。ビューラーが幾度も指摘しているように、このような特徴を持つ指示語は、命名語から厳密に区別されなければならないのである。それでは命名語はどのような特徴を持っているのであろうか。この点についてのビューラーの論旨を追ってみたい。

まず、命名語の本質的特徴として挙げられるのは、指示語が状況依存性であるのに対し、それは意味に関して (synsemantisch) 自律的であるということである (Ibid., S.367)。指示語は発話者が位置する「今」「ここ」そして自分自身を示す「私」という主観的な定位 (die subjektive Orientierung) (Ibid., S.102) の地点から、感覚的なしぐさと伴に発話され、受け手に発話者が位置する「今、ここ、私」の方向へ視線を向けさせるが、命名語は「今、ここ、私」という指示場の束縛から解放され、統語意味的な制限を受ける象徴場の中で意味を充足されることになる。しかし、ビューラーは象徴場は指示場から完全に開放されているのではなく、むしろ象徴場は指示場に依存していることを強調し、「誰でも、幼い頃にすべての命名語の意味を、直接あるいは間接的に指示された事物や事象から学びとり記憶することによって話せるようになった事実を忘れてしまっただけではない」(Ibid., S.178) と警告し、指示場の特質を再度指摘している。象徴場は指示場から完全に独立しているのではなく、逆に指示場という土台の上に成り立ち、表面上は明白ではないがそれと繋がりを持っているのである。このことから、象徴場は指示場の発話上の時空的原点である「今、ここ、私」を拡張したものにほかならない (Ibid., S.373) ということができる。ビューラーはラテン語の例 *amo te* (ich liebe dich), *amas me* (du liebst mich), *amat Caius Camillam* (Caius

liebt Camillam) を挙げ、指示場の拡張について論じている。この中で最初の2例は、ich と du の間の愛するという発話行為が、目の前の現実の世界で実際に行われ、「愛は送り手の場所としての hier から、受け手の場所としての da (君がいる場所) へと光り輝き移行していくことに」なる。これを言葉を変えて言うなら「私の所から君の所へと愛する (amatur hinc istuc), あるいは君の所から私の所へと愛する (amatur istinc huc)」と言えるであろう (Ibid., S.379ff.)。ここでは指示場と密接に結び付いた ich, du は、先ず場所を表す指示詞 hier や da が持つ「こちらの方を見てください」(Ibid., S.106) という要請を表し、純粋に方向指示的な機能を担っている。ich, du は先ず状況における話し手と受け手が位置する場所を知らせ、指示場を形成し、ich, du はその指示場の中にぴったりと嵌め込まれ、それらが位置する空間内の場所のみを告げ知らせるのである。

だが次の例文の ich (mir) は特定の指示場における一度限りの指示詞ではない。Zwei Augen, ach zwei Augen, die kommen mir nicht aus dem Sinn の ich (mir) は、発話の瞬間を越え過去と未来を問わず恋に苦しんでいる者である ich を表し、「私」という語の表す範囲 (Ich-Sphäre) は拡張されるのである。「私」は発話が行われた時点だけの「私」だけではなく、「不定の Jetzt-Sphäre[今の領域]」の「私」を包含し、もし前に挙げた例文 amat Caius Camillam が、カイウス自らカミラに対して宣告されたのならば、「カイウスは言語的にすでにある種の対象化を行い、また外部者であるかのように送り手 [ich] および受け手 [du] の記号を文中から消し去ることになる。それは Caius および Camilla という命名語の投入が象徴場をもたらすことによって可能になる」(Ibid., S.382) のである。象徴場は脱主体化 (Entsubjektivierung) (Ibid., S.382) と共に指示場から開放されることになる。だが留意されなければならないのは、ビューラーが指摘しているように Caius と Camilla が現実の発話状況に係わっているのは、第3人称の彼らが「話し手にとって Nicht-Ich であり Nicht-Du である限りでなのである」(Ibid., S.382)。つまり、指示場とのいわば無意識的な繋がりを通してのみ、象徴場は成立していると言えるのであり、「直観のない概念は空虚で＜なんらの内容も伴わない＞認識でしかないというカントのテーゼ」(Ibid., S.373) は、指示場と

象徴場の関係についても当てはまるのである。

ところで、ビューラーが述べているように象徴場は統語的及び意味的に規制されている。言語が表現するのは、世界での分節されている事態を、統語的あるいは意味的なフィルターを通してなのである。ビューラーはこのことを、文が形成されるのは「事態が現実の発話行為にいわば投影されること」(Ibid., S.380)によってであると述べている。

これを論証するために、ビューラーは $S \Rightarrow P$ (SはPである)という文を分析し、論理学と言語との違いについて論じている。それによると、言語における象徴場では $S \Rightarrow P$ という構文の意味は、その語順以外の特徴がすべて欠けている場合、SとPの語順の有関性 (die Relevanz der Reihung)によってのみ決定されるとしている。例えば Klein Geld kleine Arbeit は語順を逆にして Kleine Arbeit klein Geld とした場合とは意味が異なり、また動詞がある文でも Die Müller sind Diebe は Alle Diebe sind Müller にはならないのであり、意味を決定するには、現実の側から、換言するなら、すでに存在している事態を実際に考慮した上で行われなければならないのである。ビューラーが続いて「 $S \Rightarrow P$ という統合形式が明らかにしているのは、その文の意味の充足が発話状況の与件からも、先行および後続のコンテクストからも全く独立して行われる」(Ibid. S. 370)と述べているのも、言語は外部の世界から完全に独立し、また自立しているのではなく、言語外の世界となんらかの繋がりを常に持ち続けていることを示唆している。言語は指示場においてはもちろんであるが、象徴場においても言語外の世界との直接的な接点を、言葉を換えて言うなら、「直観的」な繋がりを保持し続けていることを、ビューラーは指摘しているのである。彼は論理学を「そこではあらゆる擬人化のステロ・タイプが削除されるだけでなく、SとPへの分化もまったく消去されるのである。たとえば論理演算式 $a R b$ (これは $a = b$ であることを表す) は、二つの関係項を象徴しているが、それらはSおよびPとしての特徴は持っていない (Ibid., S.370)」と非難している。彼の論難は恐らく正しいであろう。しかし、それは古典論理学には当てはまるが後に論述する記号論理学には妥当しいと言えるであろう。なぜなら記号論理学はSとPの内容にまで踏み込んで論理を組み立てるからである。ビューラー

は指示場と象徴場および言語外の世界との関係を詳細には述べていないが、次章でフレーゲについて論述し、続く章で哲学的及び心理学的考察を紹介した上で改めてこのことについて論じてみたい。

3

フレーゲの論理学——意味 (Bedeutung) と意義 (Sinn)

モンタギュー意味論に関しては、生成変形文法を論じる言語学者も興味を寄せ、幾つかの注目に値する論文を書いている。生成変形文法は1957年に統語論を主眼とする理論が提出され、その後、1960年代には意味部門も含めたより広範囲の言語事象を包括する理論へと展開・発展させられた。この時期はモンタギュー意味論がその形を整えて行く時期と一致し、生成変形文法からの知識はモンタギュー意味論の形成に、重要な背景の基盤を構成していることが推測される。例えば、モンタギュー意味論の統語論で使われている句構造文法や樹構造は、生成変形文法から取り入れたと想像される³。しかし、この点についてはここではこれ以上触れないことにし、モンタギュー意味論を理解する鍵となるはずの述語論理学について簡単に述べてみたい。

一般にアリストテレスから始まる古典論理学を、命題論理学⁴と言うのに対して、19世紀の後半のフレーゲに始まる、数学の関数論を取り入れた論理学を述語論理学と言う。フレーゲ自身は述語論理学という言い方はしていないのだが、その萌芽が見られるのは、彼が1884年に発表した『算術の基礎』(*Die Grundlagen der Arithmetik*)⁵においてであるとされている。彼はこの著作の中で、文中の語がそれについて言表する所の内容は、或る言語外的な客観的存在であることを表明し、實在論的な考え方を明らかにしている。つまり、存在しているのは物理的な事物だけでなく、抽象的な語が表すものも存在していると彼は考えるのである。そして、フレーゲの論理学を一貫して導いているのは、この強力な實在論的思想なのである。

さて彼はこれらの存在を区別分類して、これら分類された個々の存在を表す記号(群)を、固有名・概念語 (Begriffswort)・文 (Satz) という統語的カテゴリーに分ける。彼の言う固有名には通常の固有名の他に、

定冠詞や指示詞の付いた名詞も含まれ、例えば Friedrich der Große, das chemische Element Gold だけでなく die Zahl Eins も固有名として扱われる (Frege 1988. S.51). また概念語とは、不定冠詞を伴った語か、あるいは無冠詞の複数形の語である。そして、これらの統語的カテゴリーの区分けに応じて、固有名には対象 (Gegenstand), 概念語には概念、そして文には意義 (Sinn) という意味論的なカテゴリーを割り当てている。このように、統語的カテゴリーの区分けに対応する形で意味論的な類型が決定されるという、いわゆる〈解釈意味論〉 (interpretational semantics) の原型が具体化されている。

次に『算術の基礎』から9年後に発表された『算術の基本法則』では、(*Grundgesetze der Arithmetik*, Bd.1. 1893年)『算術の基礎』⁶で挙げられた統語カテゴリー (固有名・概念語) は、名前 (Name) 一語に言い換えられ、名前は更に固有名と関数名 (Funktionsname) に分けられる。つまり、固有名はそのまま使用されているが、概念語は使用されずに関数名という名称が使われるようになる。文はそのまま継承されている。名前 (固有名と関数名) 及び文は、何かを意味 (bedeuten) しなければならない。つまり、統語範疇の種類 (固有名・関数名・文) に応じる形で、意味範疇が決められねばならない。そこで、固有名には対象、関数名には関数、文には真理値 (Wahrheitswert) が対応づけられることになる。関数名は述語であり、固有名での補完を必要とする空所を持つ、この空所をフレーゲは独立変数の場所 (Argumentstelle) と呼んでいる。固有名は対象自体で飽和 (gesättigt) しているが、関数名は補完を必要としているので不飽和 (ungesättigt) であると呼ばれる。関数名の独立変数の場所に固有名を充当すると関数値 (der Wert der Funktion) が得られ、関数値は統語範疇の文に当たり、それが意味する (bedeuten) のは真理値であるとされた (Frege 1962. S.5ff.). 文法的には関数名は述語に当たり、固有名は主語に当たる。この点に関して、フレーゲは特に次のように強調している。「固有名は、文法的な述語として用いられるには徹底して不適格であり、固有名とは主語の意味 (Bedeutung) にはなりうるが、述語の「部分的意味にはなりえても」全体的意味にはなりえないものなのである」 (Frege 1990. S.168). 統語範疇である固有名つまり

「主語」には、意味範疇である「対象」しかなりえず、統語範疇である関数名、つまり「述語」には、意味範疇である関数、つまり「概念」しかなりえないのである。」(Frege 1990. S.168) このことからフレーゲの実在論的思想が鮮明に浮かび上がって来る。そして先に述べた<解釈意味論>がここでも、彼の実在論と深く係わり合っていることが明らかになるのである。<意味する>(bedeuten)とは、言語外の世界に何らかの形で<存在>しているものを指示しうる——このことを含意しているのである。統語範疇のそれぞれを示す語は、何かを<意味する>のである。つまり統語範疇が<意味する>対象は必然的に、存在していなければならないのである。このようにして、彼は関数論的な操作を、日常言語の平叙文に拡張するのである。

しかし、注意しなければならないことは、彼が意味(Bedeutung)と意義(Sinn)という二つの用語でもって、意味のレベルに境界を設けたということである。例えば固有名を例にとってみるなら、「オデュッセウス」という名前は意味(Bedeutung)を持つかどうかは疑わしいが、しかし意義(Sinn)は持つと言える。そして、このような指示対象を欠く可能性のある語、すなわち意味を欠くことのある語を含む文、例えば「オデュッセウスは、深く昏睡したままイタカの海岸に打ち上げられた」と言う文も、意義は持つが意味は問題にされないことになる。このような文は有意義(sinnvoll)ではあるが、有意味(bedeutungsvoll)ではないと言われる。唯一の指示対象を持つ語が、複数の意義を持つこともある。例えば「金星」という天体は、「明けの明星」と「宵の明星」という二つの意義を持つ(Ibid., 1990. S.148)。フレーゲは意味と意義の関係について、認識主体は意義を介して、意味へ接近し規定すると述べ、意義とは対象を規定する一つの方法であり、対象へ接近する道しるべとなり、その規定法、或いは接近法に従って多数の意義があることになる。フレーゲは意味と意義に関して次のように説明している。「ある学術探検家が、未踏地の北方の視界に、雪をいただく一つの高山を発見したと仮定しよう。原住民に尋ねることにより、彼は『アフラ Afla』という名前を聞き知る。彼は多様な地点を調べることにより、可能な限り厳密に、その所在地を特定し、それを地図に記入し、日記に『アフラ山は少なくとも5,000メー

トルの高さがある』と書き記す。さて、もう1人の研究者が、南方の視界に雪をいただく高山を発見し、それがアテプ Ateb と言われていることを聞き知ったとしよう。彼は自分の地図にこの名前とその山を記入する。後刻、照合によって、2人の研究者は、同一の山を見たのだということが明らかになる。さて、『アテプ山はアテラ山である』という文の内容は、同一律の単なる帰結では決してなくして、一つの価値ある地理学上の認識を含む、『アテプ山はアテラ山である』という文で言明されているものは、決して『アテプ山はアテプ山である』という文の内容と同一ではない。……『アテプ』という名前に対し、思想部分として対応しているものは、『アフラ』という名前に対して思想部分として対応しているものとは異なっていなければならない。これ〔思想部分〕は、かくて、両方の名前において同一である意味(Bedeutung)〔指示対象の山自体〕ではありえず、双方の場合に場合に異なっているところのあるものでなければならず、それに応じて、私〔フレーゲ〕は、『アテプ』という名前の意義(Sinn)は、『アフラ』という名前の意義とは異なっていると言うそれに応じてまた、『アテプ山は少なくとも5,000メートルの高さがある』という文の意義も、『アフラ山は5,000メートルの高さがある』という文の意義とは異なっている」(Frege 1980.S.112)。フレーゲのいう意義は、言語外的に存在するもの、つまり意味(Bedeutung)へ接近するための仲介的な役割を果たし、その対象への接近の仕方によって様々なものが生じることになる。意味は一意性を持ち、常に唯一の指示対象を有するが(Frege 1988.S.82)、他方意義は、限定された言語社会における公共の財産として、意味の代用を務めることもありうるが、異なる言語社会においては、同一の意義が異なる対象を表すこともあり、意義には常に揺れ(Schwebung)が付きまとうのである(Frege 1990.S.170)。フレーゲが定義する意味(Bedeutung)とは、認識論的な枠内にある、言語外的な客観的なもの、「我々の表象等から独立している或る全く客観的なもの」であり、決して単なる空想の中の、指示対象の無い語の戯れなどではない。フレーゲの論理学の基盤を形成しているのは、我々の言表(Aussage)とはあるもの、つまり言語外的なある客観的なものについての言表である、というR. カルナップ(Rudolf Carnap)が言うところの「主題の原

則」(the principle of subject matter)なのである⁸。さて、フレーゲはこの「主題の原則」について触れ、〈一つの対象についての言表〉と〈一つ概念についての言表〉は明確に区別されねばならないと述べ、次のように説明している。「概念について言表されたことを、一つの対象について言表するということは決してありえないのである。固有名は決して述語表現ではありえないからである。一つ概念について言表されたことを、一つの対象について言表するのを、偽であると私は言いたくない。そうではなく、それは不可能であり、ナンセンス (sinnlos) だと言いたい」。例えば、「ジュリアス・シーザーが存在する」という文は、「真でも偽でもなく、無意味なのである」。というのも「…が存在する」は高次の第2階概念であり、「…」の独立変数の場所に、第1階の概念を表す概念語を代入すれば、文法にかなったある有意義な文になるが、0階の対象を表す固有名や確定記述を代入した場合は文法違反を犯した文になる。もし上記の文と同様なことを言いたいときには、不定冠詞を伴った表現である不確定記述を代入して、「ジュリアス・シーザーという名前を持った1人の男が存在する」という文でなければならないのである (Ibid., S.174)。なぜならば、関数論的に決定された幾つかの統語範疇のそれぞれには、それと対になる一つの意味範疇が〈厳密に〉割り当てられているからである。この要請は、言語外にある、表象から自由な客観的なある存在しているものについての言表だけが考察の対象になる、フレーゲの实在論的な理論から帰結することなのである。フレーゲは、この統語範疇と意味範疇の一意的で厳密な対応づけを徹底するために、対象に関しては、それについての確定記述が同一の対象を意味しているかどうかを確認する、同一性 (Identität, Gleichung) の条件を提示し、概念語、関数名に関しても、その「鋭利な境界づけ」を行うために、概念を再認する (wiedererkennen) 基準 (Kennzeichen) を示している (Frege 1988. S.82f.)。これによって、意味 (Bedeutung) が混同されることなく、混じり気のない純粋な姿で特定されることが出来る。この基準あるいは条件を満たした対象及び概念は、言語外の客観的なあるものとして存在し、逆にそれらが存在するということは、それらが文法的に適正に形成された対応する統語範疇の位置を占めているということでも

ある。つまり対象及び概念が存在するということは、対象の場合、それが不飽和である関数の独立変数の位置を充足し、その対象が或る概念の集合に属しているということであり、概念では、すべての対象に関して、その対象が当の概念の下に帰属するという事、即ち、すべての対象に関して、値として一つの真理値を持つということなのである。統語論と意味論が相補的に決定されていくことが、フレーゲの論理学の大きな特徴であると言うことができる。

フレーゲが提示した論理学の要点を纏めると次のようになるだろう。

1) 文を関数を用いて表した。2) 文は統語範疇として、関数名と固有名とから構成される。3) 統語範疇は階型規則を有する。4) 意味範疇は統語範疇及び階型規則と相補的に決定された<解釈意味論>。5) 対象を表す意味 (Bedeutung) と対象の一部のみを表す意義 (Sinn) を区別した。

さてこれまで我々はビューラーの『言語理論』とフレーゲにおける記号論理学の根底を成す哲学的な着想を見てきたが、この2人の研究者を結びつける接点を見いだすことはできるだろうか。ビューラーは指示語と命名語を使用する人間の行為を、フンボルトのいうエネルゲイア *energeia* としてとらえ、言語のオルガノン (道具) モデルを提案し、人間が言語を使って、自らも含めた世界について発話するという創造的な側面を強調している。ビューラーの論理学に対する批判は、人間の発話行為の創造性を通じて作られるものであるエルゴン *ergon* を認めない、即物的な理論学の研究対象に向けられている。論理学の対象は、人間の不安定な表象に左右されないある客観的な存在なのである。フレーゲもやはりこの傾向にあるが、彼が詩人の創造力に言及しそれを理論学の対象から除外しながらも、客観性という点では劣る意義 (Sinn) という概念を論理学の射程内に収めていることは注目に値する。だがフレーゲにとって論理学の対象はすでに存在している何かであり、かつその存在している何かによって、逆に論理学自体が支えられているとも言えるのである。またビューラーも、発話という行為が世界を構成するという観点に立ちながらも、外部の対象と直接的な関係を持つ「指示場」が言語習得のう

えて、重要な意味を持つことを示唆し、人間の言語と外部の世界との接点に触れている。このようにフレーゲとビューラーの間には、人間の精神を外部の世界を写す鏡としてとらえるか、あるいは人間の精神の自発性を強調するかによる違いはあるにしても、言語の根源的機能には、人間の精神の内部を写し出すよりも、むしろ外部の対象を意識にはっきりしたものとして際立たせるという点にあることを、彼らは一致して認めていることが分かる。ビューラーの『言語理論』とフレーゲを創始者とする記号論理学——ラッセル (B. Russel) の指示の理論を含めた——を取り入れ日常言語の意味を分析するモンタギュー意味論は、外部世界が、まず直感的所与としての言語的直感を刺激するのだという共通点を示していると言える。(続く)

注

- 1 Bühler, Karl: *Sprachtheorie. Die Darstellungsfunktion der Sprache*, Stuttgart 1965. 日本語訳は、脇坂豊他訳『言語理論』(上巻1983年, 下巻1985年クロノス)を参照させていただいた。
- 2 Montague, Rechar, *The Proper Treatment of Quantification in ordinary English.*; in: *Formal Philosophy: Selected Papers of Rechar Montague*, ed. and with an introduction by R. Thomason, New Haven 1974.
- 3 デイウィッド・R・ダウティ他『モンタギュー意味論入門』井口省吾他訳, 1987年 三修社 336-379ページ参照。
- 4 アリストテレスの論理学についてカッシーラーは次のように述べている。「アリストテレス論理学のなかに残っている不備は、その〈形而上学〉によって埋め合わされ、取り繕われている。概念論は双方の領域を相互に結びつける固有の媒介項なのである。少なくともアリストテレスにとっては、概念というものは、われわれが諸事物の任意の集団の共通要素を総括する単なる主観的図式ではない。共通なものを抽出するということは、そのようにして得られたものが同じに個々の事物の因果的かつ目的論的〈連関〉を保証している実在的な〈形相〉(Form)でもあるという思想がもしその根底にないとなれば、表象の空虚な戯れにすぎないことであろう。事物の真正の究極の共通なるものは、同時に、その事物を生み出しその事物を形成する創造力なのである。諸事物を比較し、一致する徴標によってそれらを総括する過程は、さしあたっては〈言語〉で表現されるけれども、正しく導かれたならば、無規定

なものに行き着くのではなく、実在的な〈本質概念〉(Wesensbegriff)の確定でもって終わる。思惟は、個別の具体的現実のなかに活動的因子として含まれる多様で特殊的な形成態に普遍的刻印を与える〈種の型 (Arttypus) 〉を分離するにすぎない。……それゆえアリストテレスの純粹に論理学上の理論さえも一貫して依拠しているのは、まさにこの〈実体という基本概念〉なのである。科学的な定義の完全な体系は、同時に現実を支配している実体的な〈力〉の完全な表現でもあるというのだ。Cassirer Ernst, *Substance and Function and Einstein's Theory of Relativity*, New York 1973. 日本語訳はE. カッシーラー『実体概念と関数概念』山本義隆訳 1979年 みすず書房 8ページ。

- 5 Frege, Gottlob, *Die Grundlagen der Arithmetik*, Hamburg 1988.
- 6 Frege, Gottlob, *Grundgesetze der Arithmetik I / II*, Hildesheim 1962.
- 7 Frege, Gottlob, *Gottlob Freges Briefwechsel mit D. Hilbert, E. Husserl, B. Russel, sowie ausgewählte Einzelbriefe Freges*, Hamburg 1980. S.83. 或いは Frege, Gottlob, *Über Sinn und Bedeutung*, in: *Kleine Schriften*, 2. Auflage, Hildesheim, Zürich, New York 1990. S.148.
- 8 Carnap, Rudolf, *Meaning and Necessity*, Chicago and London, 1956. S.98. 日本語訳 ルードルフ・カルナップ『意味と必然性』永井成男他訳 紀伊国屋書店 126ページ。

〈参考文献〉

- 1 Cassirer, Ernst, *Philosophie der symbolischen Formen*, Bd. I -III. Darmstadt 1977.
- 2 Husserl, Edmund, *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie*, 1. und 2. Halbband, Haag 1976.
- 3 Frege, Gottlob, *Schriften zur Logik und Sprachphilosophie*, Hamburg 1978.
- 4 飯田賢一他『論理学の基礎』1994年 昭和堂。
- 5 坂本百大他『新版 現代論理学』1977年 東海大学出版会。
- 6 坂本百大編『現代哲学基本論文集 I』1986年 勁草書房。
- 7 野本和幸『フレーゲの言語哲学』1986年 勁草書房。
- 8 川本茂雄他編『言語学から記号論へ』1982年 勁草書房。
- 9 ソール・A・クリプキ『名指しと必然性』八木沢 敬他訳 1985年 産業図書。

Über Bühlers *Sprachtheorie* und die Montaguesemantik — das Zeigen und der Eigenname —

Akira SHIDA

In dieser Arbeit werden die *Sprachtheorie* von Karl Bühler (1933) und die Montaguesemantik von Richard Montague (1970) behandelt.

Karl Bühler war eigentlich ein Psychologe mit starkem Interesse für Sprache und Logik. Seine Sprachtheorie ist ein Zusammentreffen dieser drei Gebiete.

Die Montaguegrammatik war eine Semantik und entwickelte ihr Konzept aus der Prädikatenlogik, deren Anfang wir bei G. Frege (1848-1925) finden können.

Aus der *Sprachtheorie* wähle ich als Thema das Zeigfeld und das Symbolfeld. Das Zeigfeld bedeutet: Wenn man zu einem Hörer mit einem Zeigwort spricht und z.B. „hier“ sagt, dann merkt er am Klang der Stimme auf, sieht hin und erkennt den Sachverhalt. Hierbei entsteht das Zeigfeld. Zeigwörter allein sind leer. Sie sind an den Ausgangspunkt des Zeigfeldes —*jetzt, hier, ich*— gebunden. Man kann mit dem Gegenstand nur dann eine Beziehung haben, wenn man die gehörten Zeigwörter durch die Wahrnehmungen mit Bedeutung füllt. Deshalb sagen wir, daß das Zeigfeld eine anschauliche Welt ist. Das Symbolfeld ist dagegen nicht an den Ausgangspunkt des Zeigfeldes gebunden, sondern läuft nach Belieben durch Zeit und in Raum. Es gibt entsprechend drei Möglichkeiten: die Erweiterung von *jetzt, hier, und ich*. Wenn wir z.B. sagen, daß es am Bodensee regnet, erweitern wir den Raum. Ein Sprecher sagt zu einem Hörer Nennwörter oder Begriffe: Paris, Revolution, Napoleon I., hier wird zwis-

chen ihnen ein Symbolfeld gebildet. Nennwörter haben immer dieselbe Bedeutung. Sie hängt nicht von der Situation ab. Damit sagen wir, daß das Symbolfeld eine begriffliche Welt ist. Es muß aber tief im Sinn behalten, daß es seinen Anhaltspunkt sicher im Zeigfeld hat.

Die Montaguegrammatik führt als einen theoretischen Rahmen die Prädikatenlogik ein, deren Grundlage wir Frege verdanken. So soll zunächst die logische Theorie Freges erklärt werden.

Freges Logik ist von der traditionellen Logik, die noch auf Aristoteles zurückgeht, darin verschieden, daß Frege den Inhalt von Subjekt und Prädikat in Betracht zieht und die Funktionentheorie auf die Analyse der Sprache anwendet. Als syntaktische Einheit führt Frege den Eigennamen und den Funktionsnamen ein. Der Funktionsname hat eine offene Stelle, die die Argumentstelle genannt wird und der Ergänzung bedürftig ist. In die Argumentstelle läßt sich ein Eigenname oder ein Funktionsname der ersten Stufe einsetzen. Als Beispiel des Eigennamens führt er nicht nur *Friedrich der Große*, sondern auch den von einem bestimmten Artikel begleiteten Ausdruck, *das chemische Element Gold, die Zahl eins* an. Zu dem Funktionsnamen der ersten Stufe gehört nun z.B. der von einem unbestimmten Artikel begleitete Ausdruck, *ein Mann mit Namen Julius Cäsar*. Der Eigenname nimmt immer die Stelle des Subjekts ein und der Funktionsname die Stelle des Subjekts oder des Prädikats.

Frege macht darauf aufmerksam, daß der Eigenname und der Funktionsname etwas zeigen muß. So zeigt der Eigenname den Gegenstand, und der Funktionsname den Begriff. Das bedeutet, daß eine syntaktische Einheit einer semantischen Einheit entspricht. Um diese Relation der Entsprechung immer zu halten, läßt sich folgern, daß der Eigenname und der Funktionsname streng und eindeutig etwas zeigen müssen. Zeigen sie streng und eindeutig etwas, so wird das *die Bedeutung* genannt, wenn nicht, wird das *der Sinn* genannt.

Können wir eine Gemeinsamkeit zwischen K. Bühler und G. Frege angeben? Bühler betont den Schöpfungsakt des menschlichen Geistes. Andererseits legt Frege Gewicht auf die objektive Welt, die als absolut und schon vollendet hingestellt wird. Die Folgerung einer näheren Gemeinsamkeit scheint mir hier noch nicht möglich.